

□誘引捕獲のプロセス

1) 誘引の方法

シカは、誘引餌を用いることで、作業従事者が安全に作業可能な場所に誘引して捕獲ができる。ここで、誘引餌には牧草系のもの（例：ヘイキューブ）を用いることでイノシシやクマ等の錯誤捕獲や、人が集まる場所を避けて捕獲作業ができることがわかってきた。その際、誘引できる範囲は、少なくとも数メートルから時には数百メートル離れた場所にも及ぶことも判明してきている。

しかし、誘引餌を設置して捕獲ができるまで、非露出型捕獲手法であるくくりわなにおいても、誘引餌を用いて捕獲する際にはシカにヘイキューブが餌であることを覚えさせ、さらにはその場に滞留できるまで（これを餌執着状態と呼ぶこととする）誘引する必要がある。そのためには、誘引餌が用いることができるようになる段階から実際の捕獲作業に至るまで、図 4-6 に示すようなステップがあることを理解する必要がある。その期間は少なくとも1～数週間は想定することも必要である。また、非露出型捕獲手法である囲いわな等では、さらに長い誘引期間を確保することも要する。



図 4-6 シカの誘引プロセスと誘引餌（ヘイキューブ）

2) 誘引の観察・監視

「センサーカメラ」は、カメラの前を動物が通るとセンサーが働き、自動的にシャッターを切る仕組みをもつカメラである。最近では、1～3万円/台（非通信型のもの）と、比較的手ごろに購入できるようになった。

センサーカメラの使用は、捕獲手法の別に関わらず、誘引餌にシカがどのように集まっているのか、あるいは執着するようになったのかを



センサーカメラの例

知ることができ、捕獲効率の向上につながるものである。前項の誘引作業のプロセスのどの段階にあるかを知るためには、むしろ、センサーカメラによる日々の観察は必須ともいえる。

なお、センサーカメラにはインターネット通信に対応したものがあり(約10万円/台と、月々の通信料が必要)、通信キャリアのサービスエリア内においては遠隔地からパソコン、タブレットやスマートフォンで確認することができる。

(2) 誘引の手法と留意点

誘引餌を用いたシカの誘引の際、誘引餌の設置方法とその後の管理や観察の方法は重要であり、次のような留意点がある。

[誘引手法の留意点]

- ・ 最初に配置する誘引餌は、シカによく利用されている獣道の脇に設置し、誘引餌に気づかせるようにする。
- ・ 誘引餌は、とくに「食い初め」段階においては、シカがより早く気づけるよう、木の切株や落ち葉の上など視認性の高い目立つ場所に設置する。
- ・ 誘引餌は、毎日交換し、常に新鮮な状態を保つ。
- ・ 離れた場所にシカを誘引する際、をシカに誘引餌が採食されたら、その場所のヘイキューブは撤去するか少なくし、段階的に囲いわなの設置位置に近づける。
- ・ 誘引の度合いに応じて、誘引する場所への餌の配置等を検討する。

◆誘引餌の置き方と工夫（ヘイキューブの場合）



その1. 目立つ場所に置く

シカは、匂いのほか、目視で餌を探すとされている。ヘイキューブ等の人工的な誘引餌をシカに覚えさせるため、まずはシカに目立つ場所で誘引餌をシカにアピールする。

右の写真は完食した様子である（設置した翌日に完食するようになっている）。



その2. 定量を同じ場所に置く

誘引餌を置く場所に目印をつけて、定量を置くと（例：1回に置くのは20個と決めるなど）、次に確認した際、変化に気づきやすくなる。こちらは2個食べてあとは散らかした様子。

(3) 捕獲の手法と留意点

誘引くくりわな、大型囲いわな（立ち木を用いた森林囲いわな）とも、どのように誘引するかが重要であり、また、誘引餌とわなの位置関係も繊細に設定する必要がある。これにより高い効率で捕獲に導くことが期待できる。

[誘引くくりわなの運用留意点]

- ・ どのような場所に誘引餌を置くとよいか、それぞれの現場の様子にあわせて設置する。
- ・ くくりわなの根付けは、丈夫な木の根元や倒木を使う（スギ・ヒノキ等の用木は根付けに使わない）。
- ・ 誘引餌とわなの間を図のとおり設置することで、前脚で捉える確率を高めることができる。
- ・ 事前の誘引を十分行うことで、かつ、“執着”の段階に至っていることをセンサーカメラ等で確認、短期間に同じ場所で繰り返しの捕獲が期待できる。

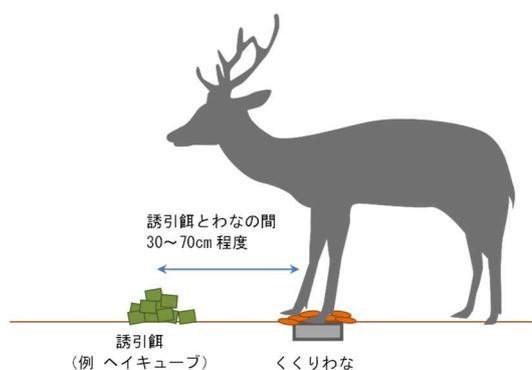


図 4-7 誘引くくりわなの設置イメージ（左）と、大型囲いわなの設置イメージ（右）

